

以下開き不良

初等科國語

五

文部省

第五學年前期用

文部省印刷局印刷

目録

一 ことばと文字……………一

二 海の幸……………二

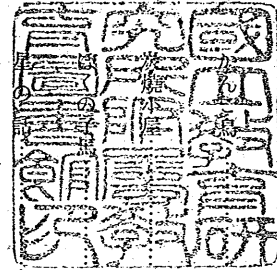
三……………四

四……………七

五……………八

六……………十

七 遠泳……………十二



九 秋のおとづれ……………十五

十 武士のおもかげ……………

「私たちが、うれしいなと感じたり、えらいなと感じたり、何かすばらしいことを思いついた時などには、そのことを、おとうさんや、おかあさんや、先生や、お友だちに早く知らせたいと思います。そんな時、
「おとうさん、ぼく、みんなで海へ行つて、ほんたうに愉快でした。」
「おかあさん、あの人は、えらいことをしたものです。」
「先生、この間から、いろいろ考へてゐたのですが、とうとうこんなものを作りました。」
「本田くん、おとうさんといつしよに山のぼりをして、ほんたうにおもしろかつたよ。」
といつて、自分の氣持を傳へます。」

てゐて直接話ができないやうな時には、手紙や文に書いて知らせます。かうして話しかけると、話しかけられた人たちも喜んで返事をしたり、いろいろなことを話したりしてくれます。それは皆、おたがひに話したり、書いてたりすることはや、文字がよくわかるからです。もし、私たちの話すことはや、書く文字が、まったくわからない外国人であつたら、いくら話してみても、どんなりつばな手紙を書いてみても、決して心持が通じ合ふやうなことはありません。日本人である私たちは、いつもこのやうに、わが國のことばと文字のおかけをかうむつてゐるのです。

自分の思つてゐることを、話したり書いたりして、すっかり相手にわかつてもらつた時ほど、うれしいことはありません。また、いろいろな話を靜かに聞き、書かれたものをくり返し讀んで、ことがらや心持がよくわかる

つた時は、同じやうに喜ばしいものです。このやうに、ことばと文字は、私たちの心を楽しくしてくれます。

私たちが、心の中で考へたり感じたりしてゐることを、ことばで話してみると、その考へや感じが、心の中で思つてゐた時よりも、はつきりして來ます。更に、ことばで話したことを文字で書き表しますと、今まで氣づかなかつた考への不足や、感じ方の淺さがはつきりわかつて、自分の考へや感じを、いつそうくはしくし、深くして行くことができます。よく、

「わかつてゐるから、話さなくてもいいよ。」

といふ人がありますが、そんな人は、まだまだことばや文字のありがたさを知らない人です。わかつてゐると思つたことでも、話したり書いたりして、始めてほんたうにはつきりするのです。

ことばと文字は、いはば心の中を寫し出す鏡でありま

す。ただ、ことばは、思つたことを聲でいひ表すのです。とはで話せば、聞く人たちは、喜んでいつまでもその話に耳を傾けます。

一 私たちは、文字を正しくきれいに書き、りつばなことばで話すことを忘れてはなりません。さうすることが、昔から傳はつてゐるだいな私たちの國語を、ますますりつばにみがいて行くことになるのです。

二 海 の 幸

沖の方は、白くもやでかすんで、見通しがきかない。

日の出前の海は、油でも流したやうに靜かである。

ばさつばさつと、波が足もとで軽く音をたててゐる。

あたりはまだほの暗く、明けきらない港の朝の風は、

頬をこちよくなで通る。

「ボー」と、力強い汽笛が、突然この靜かな港の空氣をゆり動かす。その音が、港を兩手でだきかかへるやうに

引きかへ、文字に書き表したものは、どこへでも傳はり、いつまでも残りますから、それを讀むすべての人たちに、場所が違つてゐても、時代がへだたつてゐても、ちゃんと心持を傳へることが出来ます。

文字で書き表す場合には、書いたものを何べんも讀み返して、消したり書き足したりして、自分の考へを、できるだけわかりやすく書き表すことができます。しかし、ことばで話す時には、一々ことばを深く考へたり、いひまはしを工夫したりするひまがありません。それで、とかくことばがおろそかになります。それでは困りますから、いつも話すことばに注意して、文字で書くのと同じやうな心掛けを持つことが大切であります。

いくら美しい文字で文を書いて、うそいつはりの心持を書いたのでは、だれも感心して讀まないやうに、どんなにかざつたことばで話しても、真心がこもらなければ、少しも聞く人々を感心させません。これと反対に、

いて消えて行く。

左手の山の頂が、銀のやうに白く光り始めると、どす

黒かつた海面が、にぶい光線を反射する。

折から、「バンバン」と、白い煙の輪を吐きながら、

乳色のもやを破つて、漁船が真直に近寄つて來る。これを合圖に、今まで眠つてゐた港の船が、急に目をさまし始める。

海面から立ちのばつてゐた白いもやが、薄れて行つて、山の頂に横たはる雲が、黄にくれなむにかがやき波ると、はるかな海の上をおほうてゐたもやも消えてなくなり、太平洋のかなたから押し寄せて來るみどりの波が、きらきらと光ります。

帆柱に旗を立てた漁船が、港へはいつて來たのをきつかけに、二隻・三隻と續いて港へはいつて來る。母親に子どもがすがりつくやうに、今はいつて來たばかりの漁船をめがけて、ざいざいと櫓の音もすがすがしく、たく

さんの小舟が近づいて行く。漁船のかたはらに、小舟が
びつたり寄りそふと、

「えんさらはい、えんさらはい。」

と掛聲にぎやかに、日にやけた漁夫たちが、遠くの海か
ら取つて来た数々の海の幸を、漁船から小さな舟に移
す。まるまると肥えたまぐろ、細長いかじきまぐろ、大
きなさめ——その白い腹が朝の太陽に光り、ひれが力強
くびんと左右に張つてゐる。このまぐろや、さめをのせ
た小舟は、大急ぎで岸の魚市場をめざしてこぎ歸つて行
く。

魚市場の廣いたたきの上を、鉢巻をした若者が、大き
な魚をてんびん棒につるしたり、手押車にのせたりし
て、威勢よく右へ左へ運んで行く。見る見るまぐろもさ
めも、次から次へ行儀よく並べられる。

大きな魚にまじつて、たくさんのかつをが置かれ、つ
いさつきまでびらびらとはねてゐたやうな、六七十セン

わりに張つておるおしりやうな、
活氣に満ちて生きもののやうに活動してゐた魚市場も、
ひっそりと静まり返つて、またあすの朝を待つのであ
る。

ちやうどそのころ、港のあちらこちらにもやひしてゐ
る漁船からは、朝げの煙が波の上に影を落しながら、ゆ
っくりと立ちのぼる。

三 かんこ鳥

朝日、いまあらはれて、

ああ、はるけくもこの峯に

光さし來ぬ。

薄きみどり、こきみどり、

山々のひだ縞なして、

見る目うるはし。

星をきらめかしてゐる。その間にまじつて、帯のやうな
たち魚が、いくつもいくつも横たはつてゐるのは、めづ
らしい見ものである。

四角な箱の中には、近くの海で取れたあちやさばが、
青光のする新鮮な色を見せ、まるいをけの中には、いか
が折り重なつて、今にもちゆつと鹽水を吹き出しさうで
ある。この魚の行列の間を、市場の人たちと魚問屋の若
者たちが、いそがしさうに右往左往してゐる。

荷作り場では、まぐろやさめの腹をさいて、氷を入れ
て送り出す者や、木箱にぎつしり氷といつしよにつめて
荷作りする者や、たいへんないそがしさである。新鮮を
たつとぶ魚の取引きをする魚市場の朝は、見るからにき
びさびとして、威勢がよい。「ブシブー」とけたたまし
い警笛の音をあとに残して、荷作りされた魚の箱を山の
やうに積んだ貨物自動車が、魚市場を出て行くのは、そ
れから数分のうちである。

はるかなる麓のわたり
かすかに響き、

いづくともなく霧わきて、

風のまにまに谷間より

ただよひのぼる。

かつこう、かつこう、かんこ鳥、

こだまのごと、ゆめのごと、

かつこう、かつこう。

四 炭焼小屋

青々と茂つたみどりの梢に、煙がなびいてゐる。炭焼
がまから立ちのぼる煙である。

父は、しばらくだまつてゐましたが、

「うん、おぢいさんによく指圖していただいて、ひとつ一生けんめいにやつて見るかな。」

と許してくれました。

ぼくは、うれしくてたまりません。さつそく、そのことを祖父にいひますと、祖父も、

「ほう、おまへが世話をするといふのか。よからう。ひとつやつてごらん。こまかいことはだんだん話してあげようが、第一は、馬をよくかはいがつてやることだ。日本の馬は、氣が荒いとかいはれるさうだが、それも馬が悪いのではない、扱ふ人がいけないから、馬に悪いくせがついてしまふのだ。しんせつにしてやれば、馬ほどすなほで、りこうなものは、めつたにないぞ。」

と教へてくれました。

子馬の名は、北斗とさまりました。一週間ばかりたつて、親子とも馬屋の外へ出しました。をき、をき、をき、をき、足もしつかりし一歩、さうして、夏も過ぎ秋が来て、野山の草木が枯れるころ、五箇月ぶりであちの馬屋へつれて歸りました。

いよいよ北斗は、乳を離れるやうになりました。からだの手入れをしたり、運動をさせたり、ぼくの仕事がおひおひそがしくなつたのは、そのころからです。しかし、それだけに、かはいさもいつそう深くなつて來ました。

寒い冬の日でも、二日に一度はかならず、北斗をつれて運動に出かけました。ぼくがかげ出せば北斗もかけ出し、ぼくが止れば北斗も止り、追つたり追はれたりしながら、楽しく運動しました。

二歳ごまになつて、北斗もめつきり馬らしくなりました。今年も、六月から放牧に出しましたが、去年と違つて、ぼくが行くと、北斗は、うれしさうにすぐぼくのところへとんで来て、鼻をすりつけます。手のひらに塩をのせてやると、うまさうになめます。ぼくが唱歌を歌ふ

うさうな目つきをして、始めて見る世界をさめづらしさうに眺めました。大きな犬ぐらゐの大きさで、足は、ばかにひよう長く見えます。さうして、ともすると母馬にすり寄つては、乳を吸つてばかりゐます。そのかはいいやうすは、今でも忘れません。

日がたつにつれて、だんだんばくになれて來ました。時には乳を飲むのも忘れて、ひよう長い足で元氣よく、草原の上をはねまはることもありました。

六月になると、母馬につけて、近くの牧場へ放牧にやることになりました。ぼくは、せつくなれて來た北斗を、手もとからはなすのがいやでしたが、さうしないと、子馬が丈夫にならないのです。で、ぼくは、そのころ學校から歸ると、すぐ牧場へ行つて見ました。牧場には、村のあちこちから、同じやうな子馬がたくさん來てゐて、母馬の草をたべるあとを追ひながら、廣い野原を樂しさうに遊びまはつてゐました。

のこはで遊んでゐます。

いつのころからか、北斗は、清くんのうちの子馬の青と、大そう仲よしになりました。ぼくのゐない時は、いつでも青と遊んでゐるやうでした。

九月に二歳ごまの市が始るといふので、八月に北斗をうちへつれて歸りました。

北斗は、ほんたうにりこうで、すなほです。教へることとは何でもよく覚えるし、櫛で手入れをしたり、足をあげさせてひづめの裏をさうちしたりしても、じつとおとなしくしてゐます。物に驚いてかけ出さうとするやうな時でも、「ほうほう。」と聲を掛けて、手のひらで軽く首やせなかなでやると、すぐ安心して靜まつてしまひます。この間も祖父がいひました。

「おまへがよくめんだうを見てやつたから、北斗はりつばな二歳ごまになつた。この村に二歳ごまもたくさんゐるが、北斗ほどみごとなのは見かけないやうだ。幅

もあるし、骨組も丈夫になつた。」

ぼくは、祖父のこのことを聞いて、ほんたうにうれし
いと思ひました。

二歳ごまの市が始れば、いよいよ北斗と別れなければ
なりません。一年半も手しほにかけた北斗をいつしよに
ゐるのも、あといく日もないと思ふと、ぼくは泣きたい
ほどつらい氣がします。けれども、北斗は、きつとよい
人に貰ひあげられるに違ひありません。さうして、りつ
ぱな乗馬になるでせう。その勇ましいやうすを思ひ浮か
べると、ぼくは北斗のために喜んでやりたいのです。

六 星 の 話

晴れた夜、空を仰ぐと、たくさん星が、まるで寶石
をちりばめたやうに美しくかがやいてゐます。ちよつ
と見たところでは、ほとんど無数に見えるこれらの星に

北斗七星が見つかったら、その七つの中の、下の端に
當る二つの星に注意しませう。さうして、かりにこの二
つの星を結ぶ線を引き、それをなほ右の方へ延してみま
せう。すると、この二つの星の距離の五倍ばかりのとい
ろに、きつと一つの星が見つかります。さつきさがさう
としたのがこれで、北極星といふ星です。

北極星は、いつ見てもほぼ真北にある星ですから、
夜、道に迷つた時など、この星を見つければ、すぐ方角
を知ることが出来ます。昔から、航海の目當てとなつて
くれたのは、この星です。

ところで、大空の他の星は、時刻によつてかなりあり
場所が變つて行きます。今どれか一つの星を、東へさし
出た軒端にすれすれに當てて、下からじつと見てゐます
と、やがてその星は、軒端にかくれて見えなくなりま
す。つまり星は、西へ西へと移つて行くのです。日や月
が東から出て、西へはいるやうに、星もだいたい東から

ただばんやり見てゐるだけでは、いつたい、どれがど
なのか、さつぱり見當がつきません。

そこで、まづ真北へ向かつて立つて見ませう。北の空
にもたくさん星がありますが、その中で一つだけいな
星があります。地平線からしだいに見あげて、頭の真上
まで行く途中、真中より少し低いところに、かなり大
きな星が一つ見えるのが、それです。もつともその高
さは、見る場所によつていくぶん違ひます。北の北海道で
したら、ほぼ真中ですが、反對に南の九州あたりでし
たら、低くなります。

しかし、かういつただけでは、まだなかなか見當がつ
かないでせう。さうしたら、どこかその邊の空に、びし
やくのやうな形に連なつた美しい七つの星を、さがすこ
とにしませう。これはすぐ見つかります。七月の中ご
ですと、夜九時ごろ、北より少し西へ寄つた方に、ま
すを下に、少し曲つた柄を上、ちやうどひしやくを立て

星の動き方を、もつとくはしく調べて見ますと、北の
空では、星が、北極星をほぼ中心に、圓をゑがいて動い
てゐるのだといふことがわかります。寫眞機を北極星に
向けて、一時間ぐらゐふたをあけておくと、この圓をゑ
がくやうすがわかるやうに寫眞にうつります。それでな
くても、夜九時に北斗七星を見てその位置を覚え、更に
十時、十一時に見ると、この動き方が大いに見當がつき
ます。さうして、北極星の近くに見える星ほど小さな圓
をゑがき、遠くに見える星ほど大きな圓をゑがきます。

しかし、このやうに星が動くといふのも、實はわれわ
れの住んでゐる地球がまはるから、さう見えるだけのこ
とですが、今の場合、それを考へに入れないでおきませ
う。

さて、この北極星や北斗七星を目當てにして、その附
近を見ると、いろいろの星の列があります。まづ、北斗
七星とその附近にあるいくつかの星を加へて、大熊座と

いひますが、それは昔の人が、それらの星の列に大きな熊の形を考へたからです。また、北極星を柄の端にして、北斗七星とどうやら似た小さなひしやく形に連なるのを、大熊座に對して小熊座といひ、小熊座と北斗七星との間に尾を入れて、小熊座を包むやうにのろろと曲りくねつて連なる十ばかりの星を龍座といひますが、どちらも星があまり大きくありませんから、よく氣をつけて見ないととはつきりしません。それよりも、北極星の右下の方に、椅子の形に連なる五つばかりの星はカシオペヤ座で、俗にいかり星とも、山形星ともいひますが、これははつきりしてゐますから、だれでもすぐ見つけます。さうして、この邊、北から南へかけて、天の川が、夏の夜空に銀の砂子を美しくまき散らしてゐるのが見られます。

七 遠 泳

水が、いつのまにかこいみどり色に變る。後をふり返ると、海岸はだいぶ遠くなつて、人も家も、小さく見える。目の前を、白いかもめが海面とすれすれに飛んで行く。

ゆつくりと、自然に兩腕で水を大きくかき、兩足で水をけつて進む。二列に並んだ列を、ただだれも亂す者はない。天氣のよい日、おだやかな海原を航海するやうな樂しさである。この調子なら、わけもなく遠泳ができさうだと、ぼくは喜んだ。一本松を目當てに進んで行く。いつもそばを離れない警備船の上から、先生が、

「時々頭を水にひたせ。」と注意される。

遠くに見えた一本松が、だんだん近づいて来る。初めは何も氣がつかかなかつたが、一本松がはつきり見えるやうになつたところから、今までからだを浮かしてゐてくれた海が、いくら力を出して泳いでも、なかなか前へ出してくれない。ぼく一人かと思つて前の方を見ると、みんな

「これから遠泳をする。一人残らず目的地に着くやうに。」

先生の激勵のことはをしつかり心にだいて、先頭から順々に海へはいて行つた。

熱い海岸の砂をふんでわた足の裏に、つめたい海の水が氣持よく感じられる。水の中を歩きながら、顔を洗ひ頭を水でひたす。兩手でからだに水を掛けると、ひやつとして氣持がよい。ひざから腰、腰から腹へと、海は一足ごとに深くなつて行く。思ひきつて、からだをすぶりと水の中へつけると、つめたさが身にしみわたる。

先頭から一人一人、順に泳ぎ始めた。いよいよ、ぼくの番になつた。立ち止つて、手を前へ延し足で地面をけると、からだはすいと水の上へ浮かんだ。

風は吹いてゐないが、波が、目の前の水面に、小さな三角の小山をこしらへ、それが顔に當つて、目や鼻へふりよなくはいつて来る。うつかりすると、呼吸の調子が

「潮の流れが逆になつたから、みんな元氣を出せ。」

先生の聲である。「島の端をまはつてしまへば、あとはらくだ。潮流の激しい一本松の沖あひを、泳ぎ抜けるかどうかが成否の分れめだ。」と話された先生のことばが、思ひ出された。潮流に負けてはならないと、ぼくは一かき一けりに力をこめて、潮の流れと戦ふ氣持で泳いだ。

きちんとそつて進んでゐた列が、だんだん亂れて行つた。おくれる者、列からはみ出る者。ぼくは、先頭におくれないやうに、一生けんめいで水をけつた。潮の流れはますます急になるのか、いくら手足に力を入れても、進みはにぶい。一人落ち、三人落ちして、とうとう先頭から三四人めになつた。さうなると、先頭からかけ離れて、間をつめようとしてもなかなか思ふやうにはいかない。並んで泳いでゐた小島くんも、だんだん弱つて來たやうだ。

「小島、廣田、しつかり泳げ。」

昭和二十一年三月七日 翻刻印刷
昭和二十一年三月十五日 翻刻發行
(昭和二十一年三月七日以後發行)

初等科國語五 第五學年前期用 第一分冊

◎ 定價 金五拾錢

著作權所有 發行者 文 部 省

東京都王子區堀船町一丁目八五七七番地

翻刻發行 東京書籍株式會社

代表者 井上 源 之 丞

東京都王子區堀船町一丁目八五七七番地
印刷所 東京書籍株式會社

Approved by Ministry
of Education
(Date Mar. 7, 1946.)

發行者 東京書籍株式會社

初等科國語(五)第五學年前期用 (第二分冊) 【第一分冊第七課「遠泳」ニツキ】

先生の聲援がありがたかつた。ぼくは、むちゅうで腕と足を動かした。

ふと氣がつくと、小島くんの姿が見えない。何だか一人取り残されたやうな、さびしい氣持になる。その氣持を拂ひのけるやうに、手足に力を入れようとしたが、力がはいらない。水の中で、もがいてゐるやうである。顔を水にひたして、からだを浮かすやうにして泳いだ。一本松を見たが、まだかなり遠いところで手招きをしてゐるやうだ。手足が、石のやうにこはばつて来る。先頭からは、どんどんおくれで行く。もう、だめだ。警備船へあがらうか。

「廣田、おくれたつてかまはない。ゆつくり泳げ。」と、船の上から先生が叫ばれた。ぼくは、自分の弱い心持が恥づかしくなつた。おくれたつて、ほかの人がやめたつて、ぼくだけは、最後までどうしても泳がう——そ

れからは、何も考へないで、まるで機械のやうに手足を動かした。

一本松が、右手の海岸のがけの上に、大きく立つてゐるのが見えた。もう一息だと力を出した時、ふしぎにからだは、すいすいと前の方へ軽く進んで行つた。がけの下をぐるつとまはると、今まで見えなかつた島の裏側の海岸が、見えて來た。青々とした木が、鏡のやうに靜かな海面に影を投げかけてゐる。その向かふに、眞一文字に白い線を引いたやうな砂濱が、目にしみるやうに寫つた。

「廣田よくやつた。もう大丈夫だ。潮の流れもいいし。そら、あそこに見えるだらう、あの砂濱が、到着點だ。」

ぼくは、全身の力を腕と足とにこめて、遠い砂濱をめがけて、元氣よく泳いで行つた。